

	讃美歌 1954	讃美歌 第二編 1967	讃美歌21 1997	聖歌	新聖歌 2001	インマヌエル讃美歌 1965	ひむなる 2001
文体	この集に取めた歌詞はほとんど全部文語体である。	できるだけ口語体の歌を多くとり入れようと試みた。	現代の会衆が理解できる言葉として、できるだけ口語化を試みましたが、文語のまま残したものもあります。		一つは、言葉が現代の人々には分かりにくくなってきているので、もう少し分かりやすい言葉に変えられないかというものでした。しかし、日本の詩の性質上、字数が制限されることから、文語調にならざるを得ないなどの現実には直面いたしました。		口語で歌える讃美歌『ひむなる』アンケートは、何よりも口語への要望が非常に大きいことを示していた。
文体		しかし、日本語の口語体は文語体と比較して同じ意味内容を表現するために平均約15パーセント多くの音節数を必要とするため、特に翻訳の歌では口語体の使用がかなり困難であって、	古語そのままの難解な言葉や文語表現等は現代の人々、特に若い人々には理解することが難しく、言語感覚のずれは受け止め方に大きな違いをもたらしていました。				
用語	先ず古語、廃語、難句などをわかりやすい語句に改めた。		従来より指摘されていた難解語、差別語、不快語、国家神道用語等は避けるように努めました。				
用語							
漢字	常用漢字のことは考慮したけれども、必ずしもそれによらなかった。	だいたい当用漢字を使用し、またその音訓表に従ったが、キリスト教の慣用語や、意味を補うために用いた漢字などで、多少それ以外のものを使用しているが、その場合にはふりがなによって読み方を示した。					
仮名遣い	文語体には旧かなを使うのが原則であるが、この集では新かなを用いた。	送りがなについては、1958年（昭和34年）の内閣告示による用法にほぼ従った				しかし、「エス」を「イエス」と直した以外は、讃美歌明治版の発音指示に従い、現行版の新しい発音には、よらないことにした。	
句読点	歌詞には全部句とう点をつけた。						

	古今聖歌集 1959	聖公会聖歌集 2006	新生讃美歌1 1989	新生讃美歌2 2003	希望の讃美歌 2006	教会讃美歌	みことばをうたう 2005
文体	文体はいままでどおり文語体を用い	まず、口語の詩を用いたということです。もちろん文語文の聖歌も多くあり、それらは『古今聖歌集』から引き継いだものが中心です。しかし、新作のものにも随所にみられます。			わかりやすい言葉は大切ですが、歌にのせる言葉は、響きも大切です。また日本人として、古くても美しい言葉はいつまでも大切にしたいものです。	讃美歌は大衆のものであることを考え、なるべく平易な用語を用い、すぐ理解できることにつとめた。	歌詞は、どちらも「歌ことば」で、現在私たちが使う散文や会話の日本語とかなりかけはなれておりますが、
文体	歌の種類と年代とに応じ、それぞれの特徴を活かすため、かなり古い表現また新しい表現を許容した。	本書は何よりも詩の美しさと歌いやすさを大切にしました。			他の歌集から借用したものの中には文語的表現と口語的表現が混在しているものもありますが、今後の評価に委ねることにしました。	しかしうたうことを考えると、今ではまだ易しい文語体が適当であると考えられるので、全体的には文語体風の歌詞になっている。しかし一部は思い切って口語体を採り入れたものもある。	
用語				6、不快語・差別語の排除			
用語			既刊歌集より転載の場合 可能な限り原歌集に忠実に従ったが、当編集方針に従い一部用語を統一する。				
漢字	常用漢字のことも充分考慮したが、それだけに制限することはむづかしいことであった。		「常用漢字」・・・使用を基本とするが、特別な場合のみ「赦す」「聖い」「畏れ」など教会用語を用い、意味内容を表現する。			用語については、必ずしも当用漢字、かなづかいにこだわらず、	
仮名遣い	新仮名づかいを採用した。		・・・「現代かなづかい」使用を基本とするが、				
句読点							意味を明らかにするために、句読点の他にスペースを空けたり、ルビや簡単な注をつけてあります。

